













Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, spanning the right page of the spread.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, spanning the left page of the spread.

Handwritten text at the bottom of the left page, possibly a signature or date.



南  
嶺





多羅葉經卷之一

花さくら

堪忍をい〜ゆ〜やむのうけ 一葉  
 名のそやおさりの人を呼子音 ぶ希  
 いま一人信をつまきん 是れ宿 素葉  
 む乃亦もひとりいた〜ぬ日〜けし 蜀三  
 手〜手 兼もあふ〜夕櫻 雨考

二年ふり〜い〜お〜ぬ梅〜うね ぬ塘  
 藤むのそ亦れぬも亦〜えん 東陽  
 茶さ〜茶はのむ〜る月お〜う茶 月船  
 花さ〜るやんまさ〜う花さ〜い茶 白老  
 又〜何や音のま〜る花さ〜る 米年  
 花さ〜やち〜ぬ茶もむつ〜き 春中  
 嵐山の杖を〜〜〜 春中  
 う〜〜と場所を遠入茶〜ん〜茶 春中



をわさくに初茶碗のなまふー  
茶のきや人のほすみてちーき  
きんくと籠子れあらは格か  
静さそしおちとむと茶果ー  
茶さもす馴くおのゆあーの南

庵中

花のけ肩て風きるをりもふー

菊丸

米砂

一〇〇〇

貞秀

燕市

素玩

独坐

肘痛くく懐い毎日まてくふ  
茶うくまふみまや五幾内  
のこきーや冊中より船出して  
跡おつそやるおと静あり  
ふれ自落さく茶とこよらん  
つりり燈の中なる秋風

一茶

素玩

茶

玩

茶

玩



ウ

繩解て廉又換る 善つ不 桑

皆とらるる 六波羅の者 玩

あてしるのむ又思て 節あり 桑

森あき二極又星たてり 玩

むく鳥鳴や何なき 水たると 桑

桑屋く横よるあゝ海 玩

吾もにそ兼くせん 水貫ん 桑

臨荷乃のろき 水府の除院仏 玩

子供くをたゝいの中へ 抱ひせ 桑

枕乃さうり 能とと 出る月 玩

空を流せとうりの川 ありて 桑

對のきききき 鳴る 春先 玩

今世をおのぬと 思ふ 春も何り 桑

け夕く 小 孩子 康脊山 桑

小 鳥 居の ぬへ ちよら 海り 初く 水 玩

女ふく けり 輪 抱る 春の 桑



其持の持れつゝる 這入口

雷を鳴 睡はけしある

一又く 懐の香 ぬちやり

さんたう おてねある 草花植

目のけきのふ 碎けし 家の番

おとく 靴に 酒を 振るふ

大川一敷て 志まひし 枕のみ

戸棚乃 隅くくす 意人

十ウ

麓へい 夜より 卯れたうま

極楽浄土 みにやう あり

あつ 風号れ 門を 喚出す 宵の願

三日 法度 又むしる 昔の柴

何のさりと 山の 湯煮ふ 茶喫て

あをひらう 又 伝引し 喜

玩

桑

玩

桑

玩

桑

玩

桑

玩

桑

、

玩

桑

玩



春の部

むらう 咲て久しく 梅の蒼うか

久 臧

ほくくく 我もむらうの月も

大 節

春能るおや ちすも 前て

孤 山

白魚や 十節と ぬすも 春能る 舟

寥 松

いよか ちとけ てるよ 春 梅

得 暮

苗代や ちりりて ひと ちやう

丸 柳

去 筆 ちや ちや とい 木 瓜 董

素 撲

ちり 魚 ち 梅 ちり ちり ちり

牛 馬

信濃

梅 ちと つめ ちき 茶 ち ちり ちり

希 杖

世 ち 割り ちと ちり ちり ぬ ちり 像

魚 洞

窟 ちと ちり け ちり ちり 茶 ち

女  
春 旌

ち ち ちり ちり ちり ちり ちり

春 甫

神 ちり ちり ちり ちり ちり ちり

白 鳥



喜風や一浪さゆる廉高とら

高賞

月も日もたけや柳の間く

子爵

星も月もあまも何や織目

石羊

下總

一二寸伸てむゆらすすむいふ

養城

人の来て正月まするいあり哉

尼素月

奥陸

了めの空室也の舎しとあり

冥了

わけ能もあそそまら鳥う系

馬年

二人しそまわうれみち柳り

日人

浪かきし岩み道あり松の系

東峰

字能戸ハ月より来よりまら月

たよ女

春風よこしちもみきす小魚賣

治橋

武蔵

一位もらやうくはもまの系

五段

五段もまをてんをや門田の養道と

石城



緋白あふあさあきのむつさうか  
 ゆるりと雨降時や日本橋  
 もう一日さ果るさや春北海  
 美草やむしを従ふいせの番  
 抑むよりさ果る外を鳴りさう  
 くるさあ 暮れすくす 平より  
 校さあハ 静あぬとく免の志  
 うらとけとまやぼく 未よとま

松島  
 斜燕  
 春旌  
 と根  
 松俣  
 石丈  
 吳末  
 松好

夕風や里ハ 氷の解おぬ家  
 葉のむね散りも春のるるん  
 風のすむ雲とさうぬむの春  
 鶴乃ふとさうさうも 雲 白く  
 多山の藤もめとさくかすさうあ  
 永日のあまうさうや 筑波山  
 山登や ぼくをさうもさう  
 さうぼく ぼくさうや 春の空

高山  
 申二  
 臨民  
 車泉  
 標白  
 我石  
 茂陵  
 唇兆



さう時よまをてつまつくや作第

魯十

まるやおろくにまゐる小娘山

帝補

まゝお雲人の上う降やまぬ

抱月

まゝお白のいんえさうりうをま北山

まゝ

越中

まゝおれをまゝおふー梅のふ

あふお

まゝおの世はまうてふー梅のむ

まゝ白

下野

ハ

借ふてまゝまゝ清寺一の柳

葛松

まゝお啼くまゝ毎の朝光星

夜上

まゝお乃教りまゝいまんころれま

楚雀

揚津

まゝお汁や板を踏んで啼鳥

あふ

まゝおおおのくまゝおやおのまゝお

星福

まゝおお子の小見おをてつくく

あふ

河内



噂りちの里ハ高の帯一の那  
未紀

山城

嘗て神音おとぬ于菜寺  
杜蓼

幸のけえ唐丸く浦の松ふ  
古卯

嘗や何変てをさゆ。その風  
金菜

近江

志しみけりり並一とる柳かま  
みき

丹后

七種又浅水て急さく莖哉  
馬良

安藝

うめふし庵の煤の二条こし  
言性

うちふ居るくせも付りしつ飾  
管老

肥前

梅柳東海を能大くしき  
はめ

長門

畠中に大を打落す山路哉  
羅凡



多羅葉經卷之二

友の部

露の世とこゑとてさうくと蓮の茎	車両
さけくと梅子あふく壺扇小	心非
油取して人よ細き糸ほくまき	寺静
あゝとさたのやととや友の月	竹枝
百お中よ梅屋れんをて部云	對山

壁ぬりれふもまをある暑小	桂露
又取すめの羽を子代の鳥	吐風
まゝゝゝる人と人とや垣玉と人	兼石
梅子の夕風ひくゝ那須河系	芸山
にろくと菊ふやう来子苗う家	小元
梅あゝや井田の里北小昼めー	寺三
すゝきゝゝ梅や山家の五月あ	砂奇
江戸橋きくくらぬとらお松魚小	子と春



蓬生もすさめぬ時や夏の月

蓬物

六月やうねを流するの川

一蹴

上野

やまをぬとりふや昔よれむひと

可布

酒くさた猿狐うや蓬れそ

鹿太

字より又寝ふて結ふ清ふる子

浦人

越后

芦いこく所月をさきり風おもて

石海

土

飛騨

夕ららの色そ人強いのほり一可菊

儲史

越中

我うけを人よりより砥清ふ

彦心

若狭

きりたふす板をまきみふ如

雲居

山埜

相ぬある雲をそ骨の影る

子崖



苔のむせよほねくい先安し  
五芳

うーれふよくよこしかく文うぬ  
女  
きと

色江

船のめー海一澄水て雪の峰  
鳥頂

武苑

采古香雪経ぬる袖いあし  
守一

後り来て清水の底のこりれ米  
林香

船松の根うー消りりうりあを  
梅之

志く雪の晴くくはあ葉哉  
一松

りいみくそ人の名のもそ采古香  
和調

一里の海はよかりる布らんりぬ  
楽水

夕立やうゆいゆゆ山峰乃香  
老翁

雪のこくくくくくみまは深子うり  
金翠

下野

いとくくくぬまゆや白さ  
牡丹  
松蔭



おとさけあつ時二ッ 時今を

竹文

安房

夕とまの待留れありて無の敵

其又

信濃

管状梅又け色 暑う那

海香

孫ふーよ願うけてゆふすくみ

招字

下總

仁和寺や法鼓の歌も五月あ

李峰

海をえて風二筋のそよふり船

潮月

みしうおの家の後くぬきま

如灰

さみしねせむせ又降 無水さ

聖牛

時をりぬ 燈とてりり 夏の川

五幡

鳴とまのまの恨とるおとま

云丸

麦秋ととー 暮 際もなうりま

南未

けーれ花あふまき川のかんか

汶里

鳴くいな 急登のほのきあうり

五穂



此の葉も葉を子出ぬるもの	倍	葉
三日月海窓へ寄りぬる家	其	伯
牡丹を登る水	其	棠
垣をよみぬ波くもりや牡丹若	茶	高
清き水の中を流るる水	水	花

多羅葉經卷之三

一 ありき何とや古し	一 布
くく流るる水	水
すくは編人のいふまゝ	李
竹をハ	葉
庭とくも何とや啼き	水
志をく	布



古雛をまゝへて聖衣をむよ

既

袴乃うけをのせくさ

峰

さ〜とつそのけるま

鳥

冬のきらりの着付をま

丸

七種の一〜と〜ぬそのゆ

布

垣根をすむ月ハ

既

鴨子巢ふと〜けをあ

峰

老のま〜のさうけあ

鳥

生壁のあ〜あるを業

元

た〜ひのあ〜る稲妻

布

秋風乃息〜る〜つ〜此

既

刺帰を〜けを垣み

峰

赤たのむわけりも

菜

ま〜〜さや祥のつを

松

吾島の母の多原を

秋

耳



多羅葉經卷之四

秋の部

信濃

秋風の先へくとあまの川

有人

ころひあふも路もあまの月

可厚

夕山や小きくこゝろて落しる

豪鏡

是きの輝ハ折るり海の月

武日

お模

月の戸やふほんきく伝へす

羅喙

尾張

千細又日もくはくつる世くうふ

沙鷗

さひゆる最のいありも小和礎

休有

めろくけた年又登るる寸あは秋

岳格

壺河

名月れくはふ山家のあまの那

卓池

甲斐







筑前

明くおひさのきりて北川

泉左

近江

松風や粟津のつ子川といふ

申富

朝さや隣の庭の庭うき

きん

扇柳 松乃 鬼 ささあり

旦多

輪をうりさひてはあり

山松

院をのよかおしる音森うき

蕉雨

ハ朝をいはふて家のうきあり

管笠

寓居

葦も先のあゝの垣ぬき

表丁

堪忍のきぬきよきす

魚丸

常陸

かゝたちの風よたろき秋の塚

利根古

子志の松や福妻葉お散

孝尺



紀

月更了人老のまゝ 川系うか

素英

秋もや二日此門よ まよりり

月和

出羽

了らばつゝも人さるるまじあし

林山

武藏

後ほどうぬりをほめ 秋乃山

五福

見物の出るまきり 野の水

石市

横よりのまきりまきりの見よこ

丹風

縁すまふ 東街道へおまきりり

冢得

舞る人をまきりねまきり月の歌

秀鶴

雪のまきの古葉もおまきりり

きく盛

名月のまきり人の歌もか

輕隱

秋とよ声なりつゝの鳥うら

國村

うちまきりまきりり月のお

水佳

舟曳のまきりりあれた秋のま

あき



陸奥

むく世三々く見まぬも種よ物る

芙蓉

三よれを名月ゆぬおもあし

白人

既望の出あふをても表をり

権阿

多羅葉經卷之五

冬之部

荒邪の相もくをぬくを水也

乙二

そののうめ舍利ある新白いり

与人

能あしり来て焚つて本葉は

紫明

系者も楯よまけついで乃神

世竹

黒木せせ葉を種よ降しこれ

且く

武蔵

我とけ教ふとさきり帰るを

土崎

雪つれふくの末のあり余る

五十二



葉ふららちを二日掛たり枇杷の系 牛系

言々七里を丁菜酒木の段上 巢古

明布のやん法よくも啼きさる 南人

と一程赤凡のともは寝まら 菊鳩

衣うつ音もきききききき 三化

庭の竹もきききききききききき 孝道

深山木の苔も海もきききききき 確令

松久の浦ぬしてきききききききき 錦成

を江

信くれて静み音の降出しぬ 雲鳥

ころおりと隅田の目おや音のぬ 反鳥

城中

音りや音のうらぬおとまり 乾夫

但馬

あつくと小春の松咲きさる 鳳了



言に多月 舞しと付ら 扇 楳

凡 祇

長崎

言むと山 女さくらとや 雪の山

くく 風

山 城

日くくふ 風ふくに 砒乃 鞆

雪 旌

鞆つふふ 多き掛き 秋の 風

梅 價

言まきくの 鞆おりしる 赤 櫛

葵 札

あつたのいふ 中けあき 了や一 戦場

もくもく ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

中又 ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

ま ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

ハ ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

或ハ ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

く ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

あ ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

さ ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね







きんぎょあまの編みかきあまのきんぎょ  
あまのきんぎょあまのきんぎょあまのきんぎょ  
あまのきんぎょあまのきんぎょあまのきんぎょ  
あまのきんぎょあまのきんぎょあまのきんぎょ  
あまのきんぎょあまのきんぎょあまのきんぎょ  
あまのきんぎょあまのきんぎょあまのきんぎょ  
あまのきんぎょあまのきんぎょあまのきんぎょ  
あまのきんぎょあまのきんぎょあまのきんぎょ  
あまのきんぎょあまのきんぎょあまのきんぎょ  
あまのきんぎょあまのきんぎょあまのきんぎょ

戊寅

八条山人室於也



